

ヒュームとスミス（スコットランド啓蒙思想研究）

報告者1 森 直人（高知大学）
報告者2 犬塚 元（法政大学）
リプライ 壽里 竜（関西大学）
世話人 篠原 久（関西学院大学名誉教授）

（合評会） Ryu Susato, *Hume's Sceptical Enlightenment*,
Edinburgh, Edinburgh University Press, 2015, xii + 348 pp.

セッション趣旨

デイヴィッド・ヒュームとアダム・スミスを中心とする「スコットランド啓蒙思想」の（継承・影響関係をも含む）「多面的研究」が本セッションの主要テーマであり、これまでの社会思想史学会では、「プーフェンドルフの政治思想」、「ヒュームの政治思想、経済思想」、「スミスの法学講義」等の報告がなされてきた。今回は EUP の新しいシリーズ *Edinburgh Studies in Scottish Philosophy* の第一冊目として刊行された壽里会員の上記著作をとりあげ、二人のヒューム研究者による「発題」報告を踏まえて、「懐疑と啓蒙をめぐるヒューム思想」について種々の角度から検討を加える機会にしたい。

森直人氏による報告（発題）

本書をめぐる今後の議論への一助として、以下の4点を提示したい。

第一に、第4章でのヒューム奢侈論は、'nuanced defence'という標題にもかかわらず、関連する思想家と比較して、より一方向的な奢侈擁護になっているのではないかという疑問にかかわるものである。この議論の一環として、商業社会が生み出しうる「偽善」と「分業の弊害」という問題点が指摘されている。前者は、他者の評価のみを追求する傾向が実在と外見との乖離を拡大させ、後者は、分業が労働者を単純労働の反復のうちに閉じ込めることで知的衰退を招くという危惧である。著者は、この二つの危惧に対するヒュームの沈黙を正当に指摘した上で、その理由を次のように説明する。

ヒュームの考えでは他者評価こそが道德の基盤であり、その限りで食欲を抑制する無害な奢侈は問題なく是認される。内面と外面の乖離は偽善ではなく、むしろ聖職者に見られる自己欺瞞こそヒュームが問題視する欺瞞である。観察者の視点を重視する理解は、キケロにおいても存在するある種のストア的道德理解であり、ヒュームはこの視点を利用して、近代エピクロス主義の背後にあるアウグスティヌス的な厳格な道德主義を退けることに成功している。他方で後者の点、すなわち分業の弊害に対するヒュームの沈黙は、奢侈と労働者の知的退廃の間に因果結合を見出せないという理由から説明され、因果に関する懐疑論がヒュームの沈黙を導いていることになる。

報告者の考えでは、ヒュームはルソーらが提起した偽善の問題に対しても、また労働者の労苦や知的退廃に対しても、それらが商業社会の不可避の問題であるから沈黙したと解すべきであって、これらの事例への沈黙は、「懐疑的啓蒙」の枠組みとの緊張をもたらすように思われる。

第二の論点は、第5章でのヒュームの聖職者・教会批判に関するものである。著者は「イングランド教会に対するヒュームの明らかに丁寧な言及は『グレート・ブリテン史』第一巻におけるピューリタンについての……描写が引き起こした同時代の批判がきっかけとなっている」と述べているが、ピューリタン描写と関わるのはイングランド教会ではなく、長老派のスコットランド教会のほうではないだろうか。報告者の理解では、「中庸としてのイングランド教会」に対するヒュームの評価にはより真面目な側面がみられるように思われる。

第三の論点は、ヒュームの混合体制論評価と「完全な共和国案」をめぐるものである。ヒュームがイングランドの国教会に対し *excuse* を行ったと見るならば、混合国制や共和国案もブリテンの現在の国制に対する言い訳を含む可能性はないのだろうか。著者は「絶対君主制」が党派を抑制する上で共和国よりも優れているというヒュームの認識に言及しているが、だとすればなぜ党派の問題に対するヒュームの「理想的な回答」が共和国だったのだろうか。

第四の論点は、「懐疑的啓蒙」そのものに関するものである。報告者の理解が正しければ、第4章のヒューム奢侈論解釈は、たとえばスミスと比較して、より懐疑的でない奢侈擁護を示している。また第5章はヒュームの苛烈な教会・聖職者批判を描くが、そうした徹底的な批判は自己自身の懐疑を含むと言えるだろうか。当初は聖職者に極めて否定的だったが、やがて聖職者のなかの良質な部分との対話の可能性を視野に入れていく（Harris 2015 が描く）ヒューム像のほうが、より懐疑的であるように思われる。第6章では、党派争いの防止を自らのアジェンダとし、その理論的回答を「共和国」に示したヒュームが描かれる。しかしこの解釈は、特定のアジェンダではなく固有の時代認識を内容とする本書の「啓蒙」理解に合致するだろうか。広い意味での啓蒙に含めうるヒュームの個人的信条と、真理保証を伴わない観念連合説のようなより懐疑色が濃いものとの関係が、哲学者ヒュームの懐疑的な社会・歴史認識のうちに、彼自身の生きた信念が貫入しているという形で理解されるのであれば、本書の「懐疑的啓蒙」の枠組みには、一定の亀裂が残るのではないだろうか。

犬塚元氏による報告（発題）

1) 「啓蒙」および「懐疑的啓蒙」という分析概念の意味と意義に関して。

啓蒙概念の多様化のなか、とくに＜形容詞付きの啓蒙＞概念が氾濫・乱立している研究動向のなかでは、「啓蒙」および著者の掲げる「懐疑的啓蒙」という分析概念の意義や有効性について吟味しておくことが重要と思われる。

著者は「プロジェクトやアジェンダ」としての啓蒙理解を退けるが、思想は、社会や政治への働きかけをもつ限り、何らかの「プロジェクト」や「アジェンダ」であるとみなすことが可能であるし、なにより、著者の啓蒙理解に含まれる「社会の改善 betterment」はそれ自体が「プロジェクト」や「アジェンダ」ではないか。また第 3 章における懐疑主義の理解には疑問がある。世論（人々の意識）が歴史的に変動する、という認識対象の可変性をめぐるヒュームの認識が、ヒュームの認識作用・認識活動の曖昧さ（としての懐疑主義）として読み替えられてはいないだろうか（つまり、世論の可塑性・不安定性と、世論をめぐる認識の可塑性・不安定性について、混同がないだろうか）。実質的には世論をめぐる政治思想を中心的に扱う本章を、第 2 章とともに「ヒュームの懐疑的啓蒙の理論的基礎」（p.21）をめぐる序論的部分に位置づけることが適当かどうかについても、疑問が残る。

2) 本書の思想史解釈の方法に関して。

複数の思想家の関係を歴史学的・思想史学の資格において論じる場合には、それらの思想家を比較対照するのがなぜ妥当かという点をまず吟味・正当化したうえで、複数の思想家の関係については、たんなる類似か、直接的に影響関係があったか、誰を媒介にして間接に影響があったのか、別のソースから影響を受けていたのか、等のかたちで思想家間の関係の類型分けについて、根拠に基づいて判定の作業を行う必要がある。本書での影響関係の分析の多くは当該思想家の類似性に基づいた推定である。その関係については確実なエヴィデンスが残されている場合が少ないので、可能性・蓋然性の指摘にとどまることを十分に自覚しておく必要がある。

著者（壽里竜氏）によるリプライ

1) 犬塚報告へのリプライ

本書で目指したものは、①（ある種の保守主義という位置づけを出発点としてヒューム哲学との関係を考察する）アメリカ流の政治思想史研究と、②（ディスコースごとの時代的コンテキスト分析を重視する）ケンブリッジ学派の研究アプローチとの批判的摂取である。②のポーコックはヒュームの政治思想を理解するのにヒューム哲学は不可欠ではないとの立場をとるなど、両アプローチの間には「対話」が見られない。本書ではヒュームの懐疑的啓蒙という概念を縦軸に据え、各章で横軸としてのコンテキスト分析が行われている。

思想家の関係性をめぐる分析における「類似性に基づく推定」という指摘に関しては、本書では、「当時、共有されていたであろう考え」からヒューム独自の点を洗い出すための作業に力点を置いているという側面を理解していただきたい。

2) 森報告へのリプライ

「ヒュームの奢侈論はどこまで懐疑的か」という批判に対しては、彼の議論は基本的に奢侈擁護の論調だが、その「悪しき奢侈」批判の論調が彼独自のものであり、「商業社会における偽善の拡大」については、《真の自分》を追求する姿勢に対するヒュームの懐疑と

一貫している（「知覚の束」である人間に《真の自分》など存在しない）点を指摘しておきたい。

「ヒュームの聖職者批判・教会批判」については、ヒュームがイングランド国教会への *flattering remarks* を増やしはじめたのは、まさにヒュームがスコットランドの著述家から（イングランドを含む）ブリテンの著述家へと成長をとげた証として、また「統治の根幹をなしている宗教」認識に関しては、死の間際のヒュームのエピソードにおける現状認識（迷信・聖職者支配）と希望（支配体制の即座の崩壊）との乖離として理解しうる。

「ヒュームの混合政体評価と『完全な共和国案』」をめぐっては、上述の現状認識と理念との区別で言えば、ブリテンの絶対君主制は現実的な終着点であり、完全な共和国はそこにいたるプロセスに多くに暴力と結果の予測不可能性が伴うことから、あくまでも理念に留まるということで、「政治を科学にするために」以来の、規則性・予測可能性のヒュームの思考の系として考えれば、「完全な共和国案」は一つの到達点と見るべきである。

「懐疑的啓蒙と《積極的で決然としたヒューム像》」との齟齬に関しては、ヒューム自身が「彼の個人的な超時代的信念」を抱く《強度》とその《表明に仕方》には、やはり懐疑の精神が働いているのであって、本書が意図したのは、ヒュームの規範的言明すべてを非本質的なものとして排除する態度（Hardin 2007）への批判であることを指摘しておきたい。

フロアからは、主として思想史解釈の方法をめぐって、水田洋氏、田中秀夫氏、中澤信彦氏、および山本浩司氏より質問とコメントがあった。

なお、当日の出席は約 20 名であった。

（文責 篠原 久）